

ふてるのやし、近所の子供は皆先繰り變た着物が着せたてる。内の子供丈けやがな、何時も同じ物を着てるのは、せめて正月には親の氣として一枚の物でも買ふて遣り度い、それもお前はんが働かん依てに端切の一つも買はれへんや無いか、仕方が無いさかい、有りもせぬ古切れ掻き集めて、どふぞして手など通る様にして遣ふ思て、夜の目も寝んと斯様してのやし、……コレ、聽こえたアるのかいナ。あての連れ子や無いし、二人の中に出来た子や無いか。……コレ何とか云ふたら何ふやね」

「や。お大ていや無い、能ふしてお上げなはる」

「他事やがナ全で……着物はまア仕様が無いとして、近所は皆もう餅搗いてゝやし。戸口の徳さん見なはれ、あと月あれ丈け病ふて、つまらんく云ふてたかて、矢つ張りチヤンと一斗の餅でも搗きやはるや無いか、二軒目のお芳さん、女やけども甲斐性者や、五升の餅も搗いてはる、落語家の松鶴はん、一石五斗も搗きやはつた」

「嘘や」。落語家が何のそない、能う搗きよるもんか、誇大張てよるのや、餅見たいナもん、何ふでも可えや無いか、掛け餅なと買ふときいナ」

「それで良えのなら別に氣も遣やへんわいな。近所が皆搗きやはる物やさかい、子供が歸て來て、お母ん、内は何時あも搗くのや、いつ搗くのやと訊かれるたんびに、身を斬られる様に辛いのがナ。

近所の手前も有る事や、せめて音だけでも、さしてやつたら何うや」

「ほたら何かい。音丈け位の事で可えのんか」

「出来ん事云ふても仕様が無いさかい、出来る丈けの事をしたら良えや無いか」

「諾し、音だけさしたる」

「オ、嬉し。何ぼ程搗いて呉れてや」

「汝れの我慢出来るだけ搗いたる」

「まア大きに、そんならお米云ふて來ふか」

「阿呆米が買える位なら何も心配しやへん哩」

「それでも今、音だけなとさして遣ると云ふたや無いか」

「左様ぢや。近所へ餅搗く音だけ聴かしたら良えねやろ」

「どないするのや」

「今晚夜中に俺を起せ、俺は表へ飛で出て露路の戸をドンく叩くワ。竹内さんは此裏と違ひますかいナ、賃搗屋でおますちうて、大きな聲出すネ。汝は直ぐ露路の戸を開けに來い、近所の奴が聴きよつたら、ハハア、矢つ張り搗くかして、賃搗屋が來たなてナもんや」

「何ぼそんな事したかて、肝腎の餅搗く音がしやへんや無いか」

「それをさしたるのや。俺が内へ這入たら、汝れ板の間え、俯伏に寝轉べ、俺が尻を直接にボンく